

「この使いについて離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願った。すると主は〔わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される〕と言われた(Ⅱコリント 12:8~9)。  
今日の御言葉を自分のこととして噛みしめると、誰もがそれなりに心当たりがあるのではないか。

それにしてもこの聖書箇所周辺の周辺は、パウロの実感が自らの内できつく衝突しているように見える。「わたしは誇らずにはいられない(12:1)」と述べながら、「わたしが誇る気になっても～誇るまい(12:6)」と語る。また自らに与えられた「一つのとげ(持病か)」について、「思い上がることのないように(12:7)」という恵みの意図を理解しながらも、「わたしを痛めつけるためにサタンから送られた使い(12:7)」と感じてしまうあたり、激しい葛藤と相剋が、実感そのままに語られている。だから迫力がある。

私たちは自らの苦しみを、「御心のままに」と応ずることができるだろうか。瘦せ我慢して「御意」と答えるかもしれない。とはいえ「離れ去らせてくださるように、三度(幾度も)願う(12:8)」方が自然ではないのか。

たとえ「思い上がらないように(12:7)」させる神の計らいだと分かっている、でも、「サタンから送られた使い(12:7)」と恨みごとになることが、きつい時には、真っ直ぐなのではないか。

聖書に書かれた遺訓として傍観者のように眺めると、矛盾するような相剋の記述は変化球に思える。だが、当事者にしてみればまぎれもなく直球なのだ。

私たちは傍観者ではなく、当事者として、御言葉という真っ直ぐな球を、一人の捕手として正面で受けたい。強い球を上手に捕球したならパシッという音がする。

神の讚美に、恨み言や泣き言が混じっていても、むしろそれこそが直球なのだ。

「神はその独り子をお与えになったほどに、この世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(ヨハネ 3:16)」。

私たちは十字架の愛をすでに受け取っている。だから、辛くきつい時には嘆いて、神に文句を言おう。手も足も出ず、ふて寝して、弱いままでいよう。

いたしかたなく弱さに「あまんじる」のでも、開き直るのでもない。「むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう(Ⅱコリント 12:9)」。つまり「キリストの力がわたしの内に宿るように(12:9)」。

かつてのパウロは相当強く、強い者としてふるまっていた(フィリ 3:5~6)。だから強さの限界も重々分かっている。

体力、知力、経済力、軍事力。世ではこれらの強さを求め、競い合っている。だが「力(恵みの)は弱さの中でこそ十分に発揮される(Ⅱコリント 12:9)」。逆説的な表現ではない。真っ直ぐな、実際の事としてだ。私たちは弱さにおいて恵みの力に与る。

弱さにおいて十字架の赦しに与る。私たちが弱さで生きる時、「キリストの弱さ」に与る。言い換えれば「キリストの力がわたしの内に宿る(12:9)」。私たちが弱いキリストに結ばれる時(13:4)、キリストの永遠、愛、命、贖い、創造性がこの身に帯びる。

「人間が才知を尽くして労苦するのは、仲間に対して競争心を燃やしているからだということも分かった。これもまた空しく、風を追うようなことだ(コヘレト 4:4)」。

いずれのことであれ、強さという競争は風を追うようなこと。私たちは世の比較に翻弄されず、肚を据え、キリストの弱さの内に沈もう。



#### 《おまけのひとこと》

強さは誰かよりも多く集めること それほど不安の内にある 強さは誰かに命令すること より強い誰かに命令されているから 弱さはキリストと共に 隣人とパンを等分に分かち 満足する能力